

あの世からの生還

平成 23 年 10 月 15 日

新 12 回生

小 笠 原 定 則

I はじめに

それは突然起きた。何の前触れもなく身に降りかかってきた。平成 21 年 7 月 15 日 21 時 30 分頃に自宅で胸部に激痛（食道に熱湯が通った感じ）があり、直ぐ救急車を呼び、22 時 10 分頃に防衛医科大学へ搬送された。急性心筋梗塞の部位が左冠状動脈の前下行枝と回旋枝の 2 本であり、心臓停止が 3 回あり生命が危ぶまれたり、生存しても心臓停止により血液が脳に供給されず脳の機能が全く働かなくなるかもしれない状態であった。

こんな状態から生き返った経験を是非同窓会で話してくれという要望が有り、本日東京石割同窓会の皆様に話をする次第である。

II 望郷：岩手山、北上川、不来方城及び石割桜

年齢を重ねるとともに望郷の念が強くなってきたが、特に石川啄木の短歌が胸を熱くする時がある。

○かにかくに渋民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川

何時も盛岡に帰ると開運橋から見える岩手山と北上川を懐かしく、必ず見ている。

又、中学 3 年生のクラスが甲組（担任：小笠原哲治先生）で絵画教室が隣にあり、この絵画教室から見えた岩手山が何故か脳裏に残っていて、今でも当時の風景が目に見え浮かんできてくる。

○不来方のお城の草にねころびて空に吸われし十五の心

不来方城の思い出として、生命の息吹を感じる新緑、暑さの中のむせかえる様な草の匂い、夕日に輝く紅葉、鼻毛が凍るような、耳が痛くなる寒さ、花見と桜山神社のお祭りなどがあるが、天守閣のあった場所に立ち空を見上げると、高校、大学また今でもそうであるが気持ちが安らぎ、心が昇華される思いがする。

○石割桜

石割桜は 4 月中旬から 5 月初めにかけて開花し心を和ませてくれるが、一方では壬生義士伝に書かれている「南部の武士だれば石を割って咲げ」のように心を鼓舞してくれる。以前、この同窓会で講演してくれた同級生の伊藤立身君が 30 代後半で脳梗塞になり、その後毎年石割桜の開花時の写真を送ってくれていた。伊藤君の人生には更に過酷な運命が待ち受けていた。今度は平成 18 年に膵臓癌になり、彼はより一層石を割って出てきて 400 年もの間生き続けている石割桜の力強さに惹きつけられ、花が

咲く毎に毎年花から英気を貰い、石割桜の写真には必ず我が母校の石桜精神^{せきざくら}の4文字が書かれており、石桜精神、石桜精神といって頑張っていたが、遂に5年間の癌との戦いの末、今年帰らぬ人になった。

合掌

III 病歴

1. 高血圧 (50歳前半)
2. 前立腺癌 (60歳)

60歳の時 PSA 値が 9.3、病理組織学的診断で癌が確認されたので前立腺全摘、3年後再発し放射線 25 回照射治療 (63 歳)、3 年後再発し女性ホルモンの注射療法 (66 歳)、更に今年に再発し女性ホルモンの注射療法 (69 歳) し、現在は PSA 値が検出限界以下の 0.007 を示し、癌は鎮静状態である。

IV 心筋梗塞

1. 会社の健康診断

2009年6月中旬に会社の健康診断を受け心電図、血圧、総コレステロール値及びその他の項目異常なしで、担当医師曰く「心配いりません。安心して下さい」という診断結果なので健康であることを確信していた。

2. 心筋梗塞

健康診断の1ヶ月後の7月15日、午後7時30分頃帰宅後、酒を飲みながら食事をし、9時30分頃に植え木に水をやろうとしたら、今迄経験のしたことが無い食道を熱湯が通過する感じがし、これはただ事ではないと思ったので直ぐ息子に救急車を頼み救急車で防衛医大に搬送され、ストレッチャーに乗るまでは意識があった。しかし、この後は意識を失い、覚醒しても長い間譫妄^{せんもう}状態（我を忘れて意味不明のことを言い出すこと）で自分がどんな事になっているか全く分からず、色々な事を現実の如く想像し、自分がオウム真理教の第〇番サディアンの様な所に入れられており、最終的に殺されるという恐怖感に襲われた。

V 色々な譫妄^{せんもう}

1. ある病院

・老夫婦（二人とも元大学教授と思っているが、実在せず）が開業している病院の2階（蔵書が沢山あり、研究室になっている）に行き、御主人と顕微鏡でプレパラート（病理標本）を観察し、所見について話し合う。私は風邪をひいたような状態で熱があり、全身倦怠感があり、虚脱感で車椅子に座っている。

奥様から今晚3階で食事会があるので是非出席するようにとの誘いがあり、上記の状態なので断ろうと思ったが、酒と美味しいものに目がないので残る事にした。

食事会には、以前懇意にして頂いた某国立大学医学部、薬理学教授（実在）も来ていた。奥様から食事会に初めて出席した人はワインの *tasting* をすることになっているということでワインを進められるが、全身倦怠感のためワインを飲めず、飲めないならと無理やりコルク栓を口の中に入れられる。コルク栓は無味無臭で感想を求められても話ができなかった。出された食事でも食べる元気がなく食べず、デザートとしてマンゴーが出たが食べないでいたところ、奥様に無理やり口の中にマンゴーを入れられ感想を求められたが無味無臭だったので黙っていた。奥様から今日の食事会は小笠原が出席したため台無しになった旨のお叱りを受けた。

2. 蛮行

覚醒時、*where*（自分が何処にいるのか分からない。最初はどこかの研究所か健康診断を実施する病院を想像した。ICU にいた後半の頃、ここはどこかと聞かれたので岩手県の一関（自分の生誕地）、と答えた。*who*（周囲にいる人が誰か分からない。周囲にいる人全て自分を殺す敵であると考えた）及び *why*（何故ここにいるか分からない。心筋梗塞で入院しているとは全く想像もつかない）の3W で頭が混乱し、パニック状態に陥り、周囲の人に捕まったら殺されると思った。体がだるく、痰とか鼻汁が出ていたので、重症感染症に罹患していると考えた。殺されないため、周囲の人に捕まらないようにベットの柵に痰及び鼻汁を塗り、細菌バリアを造り、近づいた人には痰を飛ばした。両足を二人で捕まえようという話が聞こえたので、足を捕まえようとした女性（後日、新井先生であることが判明）の手を齧ろうとしたらキヤーという声出し、逃げていった。注射器を持って採血をしたいという男性（後日、石切山先生であることが判明）がいたが、劇毒物を注射され殺されると思い採血を断った。助けを求めるために、和枝ちゃん（妻）及び軍ちゃん（妻の兄、身内の医師として）と何度も大声で名前を叫ぶ。一般病棟に異動した後でも、看護師の方が歯磨き粉を持ってきて歯を磨くように言ったが、この歯磨き粉の匂いが異様で、中に劇毒物が混入されていると思い、この歯磨き粉を使用せず、妻の持ってきた歯磨き粉を使用した。この時ほど、家族・兄弟の有難みと絆の大切さを感じた事はなかった。又、友人のお見舞いも心強く、感謝している。

3. 息子及び看護師の死

夜中に何回も携帯電話が鳴り、出ないでいたが余りにも携帯電話が鳴るので妻が出て話をした。何故か胸騒ぎがし、誰かが死んだのではないかと質問したところ妻は何も言わなかったが、自分は息子が死んだと思い号泣する。翌日の新聞に息子と看護師の二人が交通事故で死亡している記事を読み、二人が死んだことを確信した。妻は息子が死んだにも拘らず、泣きもせず、通常と変わらない行動をしており、息子が死んだことを一時的に忘れていないのではないかと思った。翌日、妻に息子が死んだけれどもと話したら、息子は生きてるよという返事が返ってきた。本当かと思ったが、新聞を読んでいるし信じられなかった。次の日、息子が見舞いに来て生

きていることにびっくりし、ようやく自分が思い違いをしていたことに気が付いた。後日妻から聞いたところ、先生から患者の言っていることを余り否定せず、肯定しうなずくようにというアドバイスあったとのことであった。

VI 臨死体験

1. 白装束のおばあさん

周囲は薄暗い所で何処なのか不明、白装束を着て今迄一回もあつた事のない一人のおばあさんだけがおり、「ここに来てはダメだ。直ぐ帰れ。」と言われ、ここから立ち去るが、何故かまたこの場所に立ち戻り、計3回同じ体験をした。このおばあさんは三途の川（正塚：しょうずか とも呼称する）にいる奪衣婆（子供の頃正塚のばさまと呼び、お盆の時お寺で閻魔大王と正塚のばさまは怖い存在であつた）かもしれないが、三途の川らしき所は見られなかつた。

2. 東照宮

東照宮のような絢爛豪華なところにおり、余りの綺麗さに眼を見張る。2回このような体験をし、1回は顔が金色で紫色の着物を着た般若に合い、この般若は赤ん坊を抱いて何処へ行くでもなくスーツ消えていった（現在はこの赤ん坊が生後二日目で死んだ長男であり、親がああの世に行くのを止め、助けてくれたものと考えている）。

VII 「3」は幸運な番号

1. 3番目の患者

心筋梗塞で防衛医大へ搬送され、ICU で心筋梗塞の治療を受けたが、心筋梗塞の場所が左冠状動脈の前下行枝と回旋枝の2本が梗塞し血液が下部へ流れず、心筋が壊死したのである。この2本の冠状動脈に梗塞が生じることは稀有な症例であり、防衛医大でも珍しい症例であつたという。偶然にも、小生が防衛医大に行く前に、同じ症例の患者が2名いて治療の甲斐もなく亡くなられたという。主治医の先生曰く、「小笠原さんの場合3番目なので、前に来た2名の患者さんの治療をし、手技が慣れており、手際良く早急に上手く治療出来たので助かつた」とのことであつた。

2. 心臓停止3回

防衛医大のICUに入り、心臓が3回停止した、勿論、本人は全く心臓が停止した事は知らない。心臓が停止した事により、全身に血液が循環せず、臓器の中で最も酸素を必要とする心臓と脳が最初に障害を受け、更に酸素交換する肺も心臓停止により肺水腫になり肺で酸素交換出来ず、生命の危篤状態に陥つたのである。主治医の先生が妻に「死ぬかもしれないから覚悟して下さい。生きたとしても脳障害で話も何もできず、寝たきりになるかもしれない。」と言われたそうである。幸いにも、生き延びたが、心機能は正常人の2/3になり階段を上ると息切れがあり、脳障害は子供のころから頭が悪かつたので脳に障害がおきても、これ以上障害を受けなかつた

ようである。

3. あの世に3回行きかけた事

薄暗い場所で白装束のおばあさんに3回会い、3回とも「ここに来てはダメだ。直ぐ帰れ」と言われてこの世に帰ってきた。このおばあさんが誰か分からず、今まで会ったことの無い方で、何故か三回会ったことだけが脳裏に残っている。おばあさんの代わりに、綺麗な若い女性が出て来て酒があったら、酒好きの小生は2年前にあの世に行っていたと思われる。

Ⅷ 地震は突然、死も突然

1. 熊谷維克君：高校のC組（担任：西在家 寛先生）で同級生、70歳

熊谷君とは岩手医大いた時期がほぼ同じであり、大学で会ったりしていたのでお互いの結婚式に出席している友人であった。長い間山田町で病院を開業し、患者からも厚い信望を得ていた。3月11日の震災時は診療中であったが、看護師から「先生津波が来るから早く逃げて」と言われて看護師より早く逃げた。しかしながら、10月現在も未だ行方不明である。逃げてと言って熊谷君より後で逃げた看護師の方は生存している。今年の6月に山田町に行くと、町の建物はほとんど消失し津波の脅威を実感したが、防波堤から50m位の所にあり、山田町の繁華街通りに面した病院の1階は鉄筋の柱が残っているだけで2階には入院患者用のベットらしきものが見えた。病院の前で合掌をし、哀悼の意を表してきた。

2. 小笠原成郎さん：盛岡市永井、小笠原家の本家13代目の当主、84歳、元北里大学、獣医学部教授

成郎さんは本家で、岩手大学、獣医科の先輩でもあることから毎年賀状を出していた。2009年の年賀状がこなかったのが、気になり3月に盛岡へ行った時に先生のお宅に弟と一緒に伺った。「ていそく（定則）さんよくおでった」と先生が言ってくれて歓迎してくれ、若いころ盛岡の我が家に遊びに来て湧水で足を洗った事など昔話などをしてくれた。お昼になったので帰ろうとしたら、久しぶりに来たのだから寿司を食べていきなさいと言われ、寿司を頼んでくれた。座椅子に座って昔話をしているうちに、突然目を開き座椅子に座ったまま、弁慶の立ち往生の如く動かなくなり、呼吸もせず、見る見るうちに顔が青紫色になり、最初は何が起きたか分からず動転したが、急いで弟はmouth to mouth、私は心臓マッサージをし、救急車に乗せ日赤病院に搬送したが、30分後に大動脈解離で亡くなられた。本家13代目当主の死に立ち会うとはどういう巡り合わせなのか？1年に3回は盛岡に帰っているが、15年位先生に会っておらずこの日に限って何故会いに行ったのか？虫の知らせか？小笠原家の先祖がこのように場に立ち合わせてくれたものとしか考えられず、不思議な昔からの縁としか言いようがない。

このように、お二人の死を考えると、死は突然来るものであることを痛感している。

IX 津波てんでんこ、死もてんでんこ

「津波が来たら1秒を争うので一人一人ばらばらに逃げなさい」ということを昔から陸前高田では「津波てんでんこ」という言葉で伝承しているという（山下文雄さん、87歳、津波災害史研究家、1931年、昭和の三陸大津波を経験）。死もまた同じで、一人一人てんでんこに死に、天国か地獄か分からないが行かざるを得ないのである。

X 死後は無か

心臓が3回止まり、3回あの世に行ってきた小生の死に対する考え方は、もし2年前に死んでいたとすれば、「死後は無である」と断定できる。というのは、2年前は死に対して漠然とこれから10年は生き延び、その後いつかは死ぬだろう位の軽い考え方で、まだまだ死なないと思っていたからである。森羅万象、地球上で生を受けた植物も動物もある年代を経て地球で死んでいくのである。しかしながら、心筋梗塞になり2年間生きてみると「死後は無である」ことは否定できない事実ではあるが、本家の当主の死に立ち会った事及び亡くなった長男が親の命を守ってくれたと考えるようになった事から前世が有り、現世が有り、また来世も有るといふ宗教の教えにも共鳴出来るのである。生とは何か？人生とは何か？死とは何か？古来からの人間の永遠のテーマであるこの言葉は人間である限り避ける事の出来ない対峙しなければならない道なのである。哲学の一つが宗教であり、哲学は人間の驚きから派生したとも言われているので、特に60歳過ぎた方々は死という事を真摯に考え、死という驚きの現実が来る前に死を見つめ直す事が必要である。

XI 人間が死を受け入れるまでの過程

どのようにしたら、人間は死を受け入れる事が出来るのか？アメリカの精神医である Elizabeth Kubler Ross 先生は末期患者が死を容認するまでの過程を科学的に研究し、「死の瞬間、On the Death and Dying」という本を出版した。

Ross 先生は1999年タイム誌が選んだ20世紀最大の哲学者・思索者100人のうちの一人であった。

1. 否認：自分が死ぬという事は嘘ではないのかと疑う状態
2. 怒り：何故自分が死ななければならないのかという怒りを周囲に向ける状態
3. 取引：なんとか死なずに済むように取引をしようと試み、何かにすがろうとする心理状態
4. 抑うつ：何も出来なくなる状態
5. 受容：最終的に自分が死に行く事を受け入れる状態

因みに、Ross 先生は死に際に「これから銀河を渡って、ダンスをしに行くのよ」と言って死んだそうである。

小生が9年前に前立腺癌になった時も、なんで自分が癌になるのか自問自答した事

があり、自分の運命に対し怒り狂った事があったが、現在も身体のどこかで増殖しているであろう癌に対して私が死ねば癌も死ぬからお互いに共存共栄で一緒に生きていこうと話しかけている。

XII 健康の維持：快食、快便、快眠、快脳及び快步

「人は死ぬまで元気でピンピンころろがいい」と言われているが、これはあくまでも健康で年をとり、平均寿命である 80 歳位まで生きていて初めて言える言葉である。80 歳までどのようにしたら健康を維持できるのか？健康の維持について沢山の人が講演し、本を出版しているので、それを参考にして自分にあった方法を実践すればよい。

私見としては→健康を維持するには五体を働かせ、全身を動かす事に尽きる。

快食。快便と快眠は従来から言われているが、身体を動かし働く事により食物を美味しく食べる事が出来、快便と快眠も同様の事が言える。自分の造語として次の 2 語がある。

快脳：生きがい（自分の好きなもの）を見つけ、気持ちよく脳を活性化する事

快步：運動の基本は歩く事であるの、時間のある時は散歩を楽しみながら歩く事

XIII 人間は死を望むか？

年を取ってくると「死にたい、死にたい」という人がいるが、本当に死にたいのか？子供や人に迷惑をかけるから死にたい、金が無いから死にたい、生きがいが無いから死にたい、生きる気力が無くなったから死にたい、やりたい事を全部やったので何時死んでもいい、身体が動かないから死にたい等色々な理由が有る。

人間は死を望むが、本心は生きたいのである。死にたいと言いつつ薬を飲み、朝、昼、晩に食事をし、血圧と体温を測定し、一喜一憂するのである。私の母は 65 歳で脳梗塞で右半身不随になり、死にたい死にたいと言っていたが、1 年後からは子供や孫の事及び読書などに生きがいを見つけ、生きたい生きたいと言って 88 歳迄生き天寿を全うした。

死にたいは 生きたいなれど、春は何時

この春は生きがいを見つけた時なのか、はたまた死ぬ時なのか、生を永遠に輪廻する命と考え、自然の背後にある神への畏敬の念を抱きつつ、皆様がそれぞれが推敲して色々な答えを出してこれからの人生を楽しんで頂ければ幸甚である。

心疾患 2 年余過ぎて命あり 喜怒哀楽の現世楽しむ

親鸞上人

明日あると 思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものかは

以上